

前
入 学 試 験 問 題
国 語 (理科)

(配点八〇点)

平成十八年二月二十五日 九時三〇分～一一時二〇分

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十五ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使用してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

| | | | | | | |
|---------|--|--|--|--|--|--|
| 受 験 番 号 | | | | | | |
|---------|--|--|--|--|--|--|

上欄に受験番号を記入しなさい。

草
稿
用
紙

(切り離さないで用いよ。)

第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

なにゆえに死者の完全消滅を説く宗教伝統は人類の宗教史の中で例外的で、ほとんどの宗教が何らかの来世観を有しているのだろうか。なにゆえに死者の存続がほとんどの社会で説かれているのか。答えは単純である。死者は決して消滅などしないからである。親・子・孫は相互に似ており、そこには消滅せずに受け継がれていく何かがあるのを実感させる。失せることのない名、記憶、伝承の中にも、死者は生きている。もつと視野を広げれば、現在の社会は、すべて過去の遺産であり、過去がチンデン^aしており、過去によって規定されている。この過去こそ先行者の世界である。そもそも、「故人」とか「死んでいる人」という表現自体が奇妙である。死んだ人はもう存在せず、無なのであるから。ということは、こうした表現は、死んだ人が今もいることを指し示している。先行者は生物学的にはもちろん存在しないが、社会的には実在する。先行者は今のわれわれに依然として作用を及ぼし、われわれの現在を規定しているからである。たとえば某が二世紀前にある家を建て、それを一世紀前に曾祖父^{そす}が買い取り、そこに今自分が住んでいるという場合、某も曾祖父も今もう亡いにもかかわらず、彼らの行為がいまなお現在の自分を規定している。先行者がたとえまったくの匿名性の中に埋没していようと、先行者の世界はゲンゼン^bと実在する。この意味で、死者は単なる思い出の中に生きるのとはわけが違う。死者は生者に依然として働きかけ、作用を及ぼし続ける実在であり、したがって死者を単なる思い出の存在と見なすことは、時として人々に違和感を醸し出す。人々は死者を実体としては無に帰したと了解しつつも、依然として実体のごとく生きているかのように感じるのは、そのためである。

名、記憶、伝統、こうした社会の連続性をなすものこそ社会のアイデンティティを構成するのであり、社会を強固にしてゆく。言うまでもなくそれは個人のアイデンティティの基礎であるがゆえに、それを安定させもする。したがって、個人が自らの生と死

を安んじて受け容れる社会的条件は、社会のこうした連続性なのである。

人間の本质は社会性であるが、それは人間が同時代者に相互依存しているだけでなく、幾世代にもわたる社会の存続に依存しているという意味でもある。換言すれば、生きるとは社会の中に生きることであり、それは死んだ人間たちが自分たちのために残し、与えていつてくれたものの中で生きることなのである。その意味で、社会とは、生者の中に生きている死者と、生きている生者との共同体である。

以上のような過去から現在へという方向は、現在から未来へという方向とパラレルになっている。人間は自分が死んだあとともたぶん生きている人々と社会的な相互作用を行う。ときにはまだ生まれてもいない人を念頭に置いた行為すら行う。人間は死によって自己の存在が虚無と化し、意味を失うとは考えずに、死を越えてなお自分と結びついた何かが存続すると考え、それに働きかける。その存続する何かに有益に働きかけることに意義を見出すのである。ここで二つの点が大事である。まず、それは虚妄でもなければ心理的ヨウセイでもないということである。それは自分が担い、いま受け渡そうとしている社会である。第二に、人ははかない自分の名声のためにそうしているのではないということである。むしろ人間は価値理念と物質的・観念的利害とによって動く。したがってここでは観念的利害が作用してもいるのであろうが、それは価値理念なしには発動しない。ここで作用している価値理念とは、「犠牲」ということである(後述)。

社会の連帯、つまり現成員相互の連帯は必ず表現されなければならない。さもなくばそれは意識されなくなり、弱体化してしまう。まったく同じことがもう一つの社会的連帯、つまり現成員と先行者との連帯にも当てはまる。この連続性が現にあるというだけでは足りない。それは表現され、意識可能な形にされ、それによつて絶えず覚醒せきせいされるのでなければならない。この縦の連続性Ⅱ伝統があつてこそ、社会は真に安定し、強力であり得る。それゆえ、先行者は象徴を通じてその実在性がはつきり意識できるよウうにされなければならない。先行者の世界は、象徴化される必然性を持つということである。他方、来世観が単なる幻想以上のものであるなら、何らかの実在を象徴しているのでなければならない。来世観は、実在を指示する必然性を持つということである。これら二つの必然性は、あい呼応しているように思われる。

人類の諸社会で普遍的に非難の対象となることの一つは、不可避の運命である死をひたすら呪つたり逃れようとする態度であり、あるいはそうした運命のゆえに自暴自棄となり頽廢的虚無主義に落ち込むことである。どのような社会でも、人間は、老いて行くことを潔く受け容れるように期待されている。死がいかなとも避けがたくなつたときに、その運命にシヨウヨウとして従うことを期待されている。それは無論、死ねばよいと思われているのとはまったく異なる。悲しみと無念の思いにもかかわらず、そうした期待があるということなのである。ここでは事の善し悪しは一切おいて、なにゆえにそうした普遍性が存在するのかを考えてみたい。それは来世觀の機能と深い関わりがあるように思われるからである。

年老いた個体が順次死んでいき、若い個体に道を譲らないなら、集団の存続は危殆に瀕する。老いた者は、後継者を育て、自分たちが担っていた役割を彼らが果たすようになるのを認めて、退場していく。これが人間社会とそこに生きる個人の変わらぬ有りようである。その場合、積極的に死が望まれ求められるのではない。人は死を選ぶのではなく、引き受けざるを得ないものとして納得するだけであり、生を諦めるのである。それは他者の生を尊重するがゆえの死の受容である。これは、他者の命のために自分の命を失う人間の勇氣と能力である。たとえ客觀的には社会全体の生がいかに脆い基盤の上にか据えられていなくとも、また主觀的にそのことが認識されていても、それでも他者のために死の犠牲を払うことは評価の対象となる。これこそ宗教が死の本質、そして命の本質を規定する際には多くの場合に前面に打ち出す「犠牲」というモチーフである。それは、全体の命を支えるという、一時は自らが担った使命を果たし終えたとき、他の生に道を譲り退く勇氣であり、諦めなのである。それは、自らの生を何としてでも失いたくない、死の不安を払拭したい、死後にも望ましい生を確保しておきたいという執着の対極である。一方でそうした執着を捨てきれないのが人間であると思ながらも、主要な宗教伝統は、まさにそれをコクフクする道こそ望むべきものとして提示する。このモチーフは、いわば命のリレーとして、先行者の世界と生者の世界をつないでいる価値モチーフであるように思われる。そうであれば、先行者の世界に関する表象の基礎にある世俗的一般的価値理念と、来世觀の基礎にある宗教的価値理念との間には、通底するないし対応するところがあるように思われる。

(宇都宮輝夫「死と宗教」)

〔注〕 ○アイデンティティ——identity(英語) 時間的、空間的な同一性や一貫性。

○パラレル——parallel(英語) 並列ないし平行すること。

○モチーフ——motif(仏語) 中心思想、主題。

設問

(一) 「死者は決して消滅などしない」(傍線部ア)とあるが、どういうことか、説明せよ。

(二) 「人間は自分が死んだあともたぶん生きている人々と社会的な相互作用を行う」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。

(三) 「先行者の世界は、象徴化される必然性を持つ」(傍線部ウ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(四) 「他者のために死の犠牲を払うことは評価の対象となる」(傍線部エ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。

(五) 「先行者の世界に関する表象の基礎にある世俗的一般的価値理念と、来世観の基礎にある宗教的価値理念との間には、通底するないし対応するところがある」(傍線部オ)とあるが、どういうことか。全体の論旨に即して一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。なお、採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a・b・c・d・e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a チンデン

b ゲンゼン

c ヨウセイ

d ショウヨウ

e コクフク

草稿用紙 (切り離さないで用いよ。)

第二問

次の文章は、物語の一節である。「男」には、同居する「女」もとからの妻があつたが、よそに新しい妻をもうけた。その新しい妻を家に迎えることになり、「男」は「女」に、しばらくどこかに居てほしいと頼んだ。以下は、「女」が家を出て行く場面である。これを読んで後の設問に答えよ。

「今宵^{こよひ}なむものへ渡らむと思ふに、車しばし」

となむ言ひやりたれば、男、「あはれ、いづちとか思ふらむ。行かむさまをだに見む」と思ひて、いまこゝへ忍びて来ぬ。

女、待つとて端^{はし}にゐたり。月のあかきに、泣くことかぎりなし。

我が身かくかけはなれむと思ひきや月だに宿をすみはつる世に

と言ひて泣くほどに来れば、さりげなくて、うちそばむきてゐたり。

^イ「車は、牛たがひて、馬なむはべる」

と言へば、

「ただ近き所なれば、車は所せし。さらば、その馬にても。夜のふけぬさきに」

と急げば、いとあはれと思へど、^(注)かしこには皆、あしたにと思ひためれば、のがるべうもなければ、心ぐるしう思ひ思ひ、馬引き

出ださせて、簀子^{すのこ}に寄せたれば、乗らむとて立ち出でたるを見れば、月のいとあかきかげに、ありさまいとさきやかにて、髪はつ
ややかにて、いとうつくしげにて、丈^{たけ}ばかりなり。

男、手づから乗せて、ここかしこひきつくるふに、^エいみじく心憂けれど、念じてものも言はず。馬に乗りたる姿、かしらつきい
みじくをかしげなるを、あはれと思ひて、

「送りに我も参らむ」

と言ふ。

「ただここもなる所なれば、あへなむ。馬はただいま返したてまつらむ。そのほどはここにおはせ。見ぐるしき所なれば、人に見すべき所にもはべらず」

と言へば、「さもあらむ」と思ひて、とまりて、尻しりうちかけてゐたり。

この人は、供に人多くはなくて、昔より見なれたる小舎人童こしやわらはひとりを具して往ぬ。男の見つるほどこそ隠して念じつれ、門かど引き出づるより、いみじく泣き行く。

〔『堤中納言物語』〕

〔注〕 ○かしこには——新しい妻のところでは。

設問

- (一) 傍線部ア・イ・オを現代語訳せよ。
- (二) 「心ぐるしう思ひ思ひ」(傍線部ウ)について、だれの、どのような気持ちを言うのか、簡潔に説明せよ。
- (三) 「いみじく心憂けれど、念じてものも言はず」(傍線部エ)を、必要なことばを補って現代語訳せよ。

第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

余友劉伯時、嘗見淮西士人楊勛。自言中年得異疾、每發言

答、腹中輒有a小声効之。數年間、其声浸大。有道士見而驚曰、

「此b応声虫也。久不治、延及妻子。宜讀本草、遇虫所不b応者、b當

取服之。」c如言。讀至雷丸、虫忽無声。乃頓餌c數粒、遂愈。余始

未以為信。其後至長江、遇一丐者。亦有是疾。環而觀者甚衆。因

教之使服雷丸。丐者謝曰、「某貧無他技。所以求衣食於人者、

唯借此耳。」

(『統墨客揮犀』による)

〔注〕 ○淮西——淮水の西方。いまの河南省南部。 ○本草——薬材の名称・効能などを記した書物。

○長汀——いまの福建省長汀県。 ○丐者——ものごい。

設問

(一) 「毎_レ發言_ニ応答、腹中輒有_ニ小聲_レ効_レ之_」(傍線部 a)を、平易な現代語に訳せ。

(二) 「宜_レ讀_ニ本草。遇_ニ虫所_レ不_レ応者_」当_ニ取_レ服_レ之_」(傍線部 b)とは、どういふことを言っているのか、わかりやすく説明せよ。

(三) 空欄 c にあてはまる、「如_レ言_」の主語を、文中から抜き出せ。

(四) 「丐者謝_」(傍線部 d)とあるが、「丐者」はなぜ「謝」したのか、「謝」の意味を明らかにして、わかりやすく説明せよ。

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)

草稿用紙
(切り離さないで用いよ。)